

建築物石綿含有建材調査者講習 修了試験問題例（2022年度）

試験形式：問題は40問 4 択マークシート式

合格基準：問題 40 問のうち、60%以上正解すること

※出題は、当時の法的根拠・テキストに基づいており、法改正等により一部が現在の判断と異なる場合があります。

[例題1] 次の記述について、誤っているものはどれか

1. 解体、改修の事前調査とともに、対象はすべての建材であり、レベル1, 2, 3の石綿含有の有無を調査する。
2. 調査の結果、本当は含まれていない石綿を使用していると誤って判断すると、不必要な不安感と工事に対する過度な支出が発生する。
3. 調査者の職責は依頼された調査範囲における結果だけでなく、施工者や建築物の所有者と共に解体・改修工事の全体的な責務も負う
4. 石綿含有調査者は、建築物における石綿含有建材の使用状況調査の中核を担い、調査報告を取りまとめるコーディネーターとしての役目を担う。

【解答】3 調査者の職責は依頼された調査範囲における結果のみに限定される

[例題2] 次の記述について、誤っているものはどれか

1. 防火地域・準防火地域、法第22条区域に建築物を建てる場合には、「延焼のおそれのある部分」に、十分な性能をもたせる必要がある。
2. 「延焼のおそれのある部分」とは、隣地境界線および道路の中心線よりそれぞれ1階にあっては5m以下、2階以上あっては3m以下の距離にある建物部分をいう。
3. 耐火構造には、告示に定める仕様を用いる場合と、国土交通大臣の認定を受けた仕様がある。
4. 建築図面に記載された柱やはりの耐火構造の指定番号や認定番号を調べることで、吹付け石綿であることが特定できることがある。

【解答】2 1階にあっては3m以下、2階以上あっては5m以下の距離にある建物部分をいう。

[例題3] 吹付け石綿の劣化度判定に関する次の記述について、誤っているものはどれか

1. 人為的なへこみが局所的には少数であるが、全体として表面劣化が見られないので「劣化なし」とした。
2. 全体の状態はよく、漏水の痕跡による変色が局部的に見られるだけなので「劣化なし」とした。
3. 2面(2スパン)にわたり擦過傷が見られ、また下地の段違いが出現してきているので「やや劣化」とした。
4. 天井面全域に多数の損傷があり、一部では自然劣化して下地が見えているので「劣化」とした。

【解答】3 この場合は下地の段違いが出現していることから深層までの傷となるので「劣化」と判断する。

[例題4] 建材の石綿分析に関する次の記述について、誤っているものはどれか

1. X線回折分析法・位相差分散顕微鏡法の場合、アスベストが不純物として含有するおそれのある天然鉱物およびそれを原料としてできた製品（バーミキュライトを原料とした吹付け材を除く）については適用できない。
2. X線回折分析法による定量分析は、必ずぎ酸による前処理が必要である。
3. X線回折装置による定量用の分析試料は20%ぎ酸で前処理をする
4. X線回折装置による基底標準吸収補正法では、国内の分析機関のほとんどは亜鉛板を基底標準としている。

【解答】2 定性分析で「アスベスト含有」と判定する過程で、明らかにアスベスト含有率が高い（例えば5%以上）と判定した場合は、ぎ酸による前処理作業を実施せず、一次分析試料を直接使用して定量分析が可能。